能おおしま草紙

第19号

(年2回発行)

発行所
喜多流大島能楽堂
〒720-0814
広島県福山市光南町2-2-2
TEL 084-923-2633

P.2 講演「卒都婆小町について」 馬場あき子
P.8 ガス天に鯛ちくわ 成田達志
P.10 輝久・衣恵のインタビューコーナー 帆足正規先生のご自宅に伺いました

現代と能

喜多流シテ方 大島輝久

初めて会った人に自分の職業を告げると、何か江戸時代の人間に出会ったかのような反応をされる事があります。私自身はれっきとした現代人なのですが、どうも一般的に能は現代とは掛け離れた物というイメージがあるようです。確かに能は七百年という人類史上最長の歴史を持つ演劇ですが、演じているのは当然常にそれぞれの時代の現代人です。それだけ長い時を受け継がれて来たのは、それぞれの時代の能楽師が自分が生きている時代と能とを結び付ける努力をし続けて来たからであろうと思います。

能が扱うテーマは人が生きている限り持ち続ける普遍的のものです。

愛する人への想い、それゆえの嫉妬や憎悪。

戦いでの武勇や、敗者の美学。

地獄での苦しみや仏の救済などなど。

名曲と言われる曲ほどそのテーマは明確で人間の本質を深く掘り下げ、それを美しく描き出すのに成功しています。

様々な科学技術が進歩していく中で、何となく人間も昔より進歩しているような気になる事がありますが、能に携わっていると出来る事が多くなった分、出来なくなった事も増えているなぁと思う事や、昔の人が感じ取っていた感覚が、感じ取れなくなってきているのではないか、と思う時があります。

これから能を観て頂く機会のある方には、能に内封されている普遍的なものを現代と照らし合わせて、様々な事を考えるきっかけにして貰えたら嬉しく思いますし、そんな能を舞う事を私は目標としています。

仕舞「鉄輪」大島輝久（2008.11.30）池上嘉治 撮影

講演「卒都婆小町について」

歌人　馬場あき子

大島先生が定期能二一五回のご記念として「卒都婆小町」という老女物をお披きになるというので、関東から駆けつけてまいりました。お能の世界で老女物を舞うということは大変なことだと思います。老女物っていうのはどのくらいあるか。たった五曲しかありません。今日舞われる「卒都婆小町」、小町で言えば「関寺小町」と「鸚鵡小町」、その他には「伯母捨」と「檜垣」。たった五曲しかない老女物の、三曲も小町が主人公になっている。いったい小町って何だろう、ということになるわけです。しかも、老女物の他の二曲は夢幻能ですね。小野小町だけが現在物で三曲もある。なかなか身体が動かない中、心だけは逸っている。しかも零落している。現実のそういう女としての小町を登場させようというリアルな思いが、小町物の魅力だろうと思うんですね。

実は小町の時代そのものの風俗が、まだよくわかっていないんですね。藤原氏が台頭してくる。その力を支え棒にして、天皇家を輝かせて

馬場（ばば）あき子氏

歌人・文芸評論家

昭和22年　歌誌「まひる野」に入会。

昭和23年　日本女子専門学校（現、昭和女子大学）卒業後、中学・高校の教員となる。

昭和27年　歌人の岩田正氏と結婚。

昭和30年　処女歌集「早笛」刊行。

昭和53年　歌誌「かりん」創刊、主宰。古典研究・評論面でも活躍。
喜多実師に入門し、能の造詣が深い。
新作能も制作、「晶子みだれ髪」「額田王」「小野浮舟」がある。

平成10年　「馬場あき子全集」完結。

日本芸術院会員。

いくという時代に小町はどんな役割だったのだろうかというと、仁明天皇の後宮の中で、一つの社交の言葉として、和歌を詠む。後宮に男のお公家さんが来た時は、日常的な言葉じゃなくて、どこか艶な和歌で詠み呼びかける。すると男女の間柄に情が通じ合い、和気藹々とした気分が生まれていく。そういう点で、小野小町というのは平安時代に先駆ける女流の仕事というものを後宮の中でやっていたわけなんです。

今「小町集」というのが残っていまして、小町の歌を見ますと、大変位の高い人に憧れを持って想う歌が非常にたくさんあるので、たぶん仁明天皇に思いを寄せていたんじゃないか、と言う人もいます。と同時に、色々なお公家さんから思いを寄せられる。それを拒否する歌が、これまたいっぱいあるんですね。名前が分かっている人でも小町からつれない返事をもらったお公家さんがたくさんいるんです。それで、小町は高慢だったんじゃないか、という伝説が出来上がるんですね。

それからもう一つ「小町集」を見ますと、海辺に関わる言葉をたくさん連ねて、恋の嘆きを詠った歌が多いんです。そこで、時代が下がっていきますと、海辺でさすらって男の客を取っていた身分の低い女たちが、お目見えの時に小町の海辺の歌を歌うようになるんですね。「それは小町の歌か」「私の四代前に小町がおりました」って言うと、「ほう」と。何かいいですね。そういう女性が出てくると、小町は海辺をさすらう遊女たちの祖先みたいになっていってしまうんです。そして小町の放浪伝説が生まれる。つなげてみると、若い時に帝のような人に思いを掛けていたけれども通らなくて、たくさんの公家につれない返事を与えて、そして歳を取って零落して、海辺をさすらって歩いて歌を残した、という放浪、襤褸放浪の小町像が出来上がっていくんですね。

小町に限って、老女物は現在能であるということ、これはやっぱり老衰と零落というリアルな人生の残酷さ。しかも華やかな昔を持っているので、現実の残酷がいっそう深いわけです。残酷な老人の、幾重も幾重も向こうに、ある花がなければいけないんですね。これが老女物の一番の難しさじゃないでしょうか。

今日の老女物でも、乞食の小町の遠い向こうには、古の宮中の花形でたくさんの恋を体験していた小町というものがあるわけです。老女の姿の向こうに、ある艶な気分というものが出せるのかどうか、難しいと思いますね。次に見る方の責任としてね、見ることができるかどうか、観客も試されているわけです。互いに見ようと努力するために、老女物をする時は、やる方も苦しいし、見る方も苦しい。

これは観阿弥の作品ということになっておりますけれども、零落した老人でありながら、非常に知性が高く妖艶な和歌的雰囲気を持っている。昔は美女だった。しかし、現実は厳しい。二重、三重の屈折した逆説づくめの小野小町を意図した面白い能であったはずなんです。後にだんだんこのお能の位が重くなっていって、男性によって受け継がれてきた能の中で、老女の能が一番位が高い。ここに面白さがあるんじゃないんでしょうか。なぜ男の能楽師たちは、お婆さんを演ずることに最も高い位を与えたんでしょうね。そんなことを考えると、ちょっと嬉しくなりますね。表現しにくい、老女の心、姿を、どのように表現したらいいかということにこんなに苦労をし、そして、こんなに高い位を与えたのは、なぜだろうと、ね。

幾つかの言葉を取り出してみたいと思います。ワキは高野山の僧で、都を目指してやってきます。ワキ僧の謡の中で、一つ耳に留めておいてほしい言葉があります。「生まれぬ前（さき）の身を知れば」というのを繰り返し書いてます。我々生まれぬ前の身なんて、ちっともわかんない。だけどこの僧は、生まれぬ前の身を知っている。これは、万物は流転していくものだ、現在人間として居る自分は、ある一つの存在だけれども、また変化していくっていうことを仏教の哲学として知っていると。現（うつつ）は夢である。そして、死という真実だけは動かない。死とは何かというと、仏教の真実、永遠につながる思想ですね。そういう認識をもって言うところに登場してくるのが、卒都婆小町のシテで

あると。

このシテは最初に「身は浮草を誘ふ水」という謡を謡います。小町は落ちぶれた後、文屋康秀という人に、三河の国へ赴任することになったので一緒に行かないかと誘われるんです。その時に「わびぬれば身をうき草の根を絶えて誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ」と言ったんですね。「自分は年を取って、浮草のような軽い身分になった。だから誘ってくだされば」。ここが小町のすごいところです。「誘ふ水あらば行こうと思います。」という表向きの返事なんですね。ところがこの言葉には二重の意味があって、「誘ふ水あらばお断りしようと思います。」っていうことが裏にはある。表向きは愛想よく、男を失望させないように「誘う水があったら私ご一緒しますわ。」って言っときながら、よく読むと「でも私、いや。」って言ってるんですね。

そして、この小町物で共通してることは昔は美人だった、っていう謡が延々と地謡によって謡われることなんです。昔は美人として驕り高ぶっていたけれども、今は人から汚まれ、憎まれる老女になってしまった、と言って恥じているわけです。

小町も都の内へと歩みを進める。その時の謡がいいですね。「鳥羽の恋塚秋の山、月の桂の川瀬舟、漕ぎ行く人は誰やらん」という、大変美しい言葉があります。中世の歌謡曲の閑吟集という中に出てくる非常に色やかな、艶っぽい言葉ですね。聞いただけでも色っぽいのです。

で我々は「鳥羽の恋塚」を見、「月の桂の川瀬舟」を見る。美しい京都の名所の夜の風景を心に描く。非常に色やかな恋の感情がそこに流れている。そういう風景の中に舟が漕がれていくと「漕ぎゆく人は誰やらん。誰だろう、あの高瀬舟に乗っているのは。」と言って、じっと見る。その辺はとても大事な演技だと思います。非常に艶やかな文言と、老い朽ちている小町に注目してください。小町を演ずる老女の面をよくご覧ください。年を取っていても艶。艶（つや）という字を書いて艶（えん）と読むのですけれど、艶という美学は平安朝の中で生まれておりまして、単純な美ではなく、いくつもいくつもの美が重なっている、分厚い美しさを艶といったんですね。単純ではない。小町の美というのは、そういう艶なんです。面は年老いている、けれど幾重の向こうに艶がある。今日は少し若やかな秋草模様の縫箔を腰にまとっています。それも小町の艶ではないでしょうか。薄と萩と桔梗と菊。その上に水衣をまとって、笠をかぶって出てくる。で、喜多流は真ん中に葛桶（かずらおけ）が出ている。それが卒都婆の朽ちたものだと始めからわかっていたかもしれない。けれど「あまりに苦しう候ふほどに、これなる朽木に腰をかけ休まばやと思ひ候。」と言って葛桶に掛ける。それを見てびっくりしたのは、この坊さんたち。坊さんたちにとっては、

卒都婆というのは仏体そのもの、それが朽ちたからといって、腰を下ろしていいのだろうか。とんでもないので、教えて腰掛けたのを止めさせようと、こういうことになるわけですね。

そこのところは大変面白い。これが「卒都婆小町」の見所。哲学と言いますか、仏教の問答でありますけれども、もう一つ反対の見方もできる。逆もまた真なり、という言葉があります。善悪一如とかね。善と悪とは結局同じところに行くとか、止揚していくというね、そういう問答なんです。僧は正統派の言葉として、仏教哲学によって、いかにこの卒都婆が大切なものか、説得しようとする。逆もまた真なりで、小町の方は僧を弄びからかうように、その逆説を唱えるんです。簡単に言ってみますと、坊さんはですね、「それは仏体であるから座ってはならない。」って言う。すると「でもこれは字も見えず、仏の姿を刻んだ形もないから、これはただの朽木でありませんか。」もう言葉は朽木になっている。卒都婆っていうのは、我々の建てている、ぺらぺらな卒都婆じゃないんです、昔は。塔を建てるんですね。高野山なんかに行ってみるとわかると思いますけど、非常に大きな柱のようなものを卒都婆として建てた。ここで大好きな言葉が出てきます。坊さんが説得するには「花咲きし木は隠れなし。」ね、いいでしょ。いっぺんその花の咲いた木はもう花が咲かなくなっても、名木なのだ。何か人間にも当てはまるような言葉でしょ。いくら歳を取っても若い日に得意だった時代がある。それは「花咲きし木」なんです。それは「隠れなし」と、坊さんが言う。つまり「仏体であったものは、どんなに朽ちても仏体だ」と言っているんですけれど、小町にとっては「花咲きし木は隠れなし。あら、私のことだわ。」と思ったかもしれない。だからすぐ続けて言う。これもすばらしいんです。「我も賤しき埋れ木なれども、心の花のまだあれば」「どんなに老いさらばえていても、姿は醜いけれど、こころの中に花がある」これはいいですね。

「心の花のまだあれば、仏に手向けてあげましょう。この朽木が仏体だとあなたが強調するのはなぜですか。」と。「そもそもこの卒都婆とは大日如来の請願を形に表したものだ。そんなことを知らないのか。」「形？　形ってどんなもの？」と聞くわけですね。で、坊さんは胸を張って「地水火風空である。この五つの仏体である。」と言うと、「ああ、そんなの昔聞いたことあるわ。人間の体も、そういうものから出来てるんですってね。」っていうようなことを言って、「じゃ、私もその仏さんと同じじゃない。この朽木がね、そういう五体といわれるもんから出来てるんなら、人間もそういうもんから出来てる。私とこれとはイコールね。」というようなことを難しい口調でやり取りするんです。まさに中世哲学。平安時代ではこんなことを言いません。まさに中世の哲学じゃないか。逆もまた真であるという、その逆説の真実っていうものがここに出てくるわけですね。で「善悪一如、本来無一物、仏衆生隔てなし。」というわけで、遂に坊さんが降参してしまって、これはもしかしたら本当に、悟りを悟った者ではないのかと

いうので、逆にこの小町を礼拝するということになるわけですね。

それから名乗りになり、小町であることがわかる。そしてここで老女物特有の「昔は花の顔（かんばせ）が輝いて美しい着物を着ていた。そして歌を詠み、詩を作り、優美の姿をしていた」という、回想の謡があります。現実の小町は首に袋を掛けて、そしてそこで物乞いをしているわけで、破れ笠、破れ布の姿。こうした昔と今の対比が謡われていく。その間に小町の狂気が誘発されるわけですね。突然「なうもの賜べ、なうお僧。」と言って、坊さんに乞食をするわけです。それからまたいきなり「小町が許へ通はうよなう。」と言ったり。いったい小町の許に通った男は何人いたか、わからない。確かに小町の「小町集」を見ると、ある男と贈答がありますけれど、伝説の世界では、深草の少将が小町の恋人の代表にされているわけです。小町の許に通う深草の少将が、小町に乗り移ってくるんですね。そこで小町は、昔に還るように水衣を脱いで、舞を舞う時によく使う長絹という幅の広い衣装に改めまして、深草の少将が小町の拒否によって、いかにつらい思いをしたかっていうようなことを、綿々と実演する。恋に苦しむ男を実演していくうちに、だんだん自分がしたことのひどさを悟っていくんじゃないかしら、と思うんですね。自分がいかにつれないことをしたか、非人間的なことをしたか。百日も通って来いとか、雨が降っても雪が降っても通って来なくちゃいやだとか、いろんなことを言ったのは、自分の過ちだったっていうことがわかるんじゃないでしょうか。

実はいつも「卒都婆小町」を見ていて不思議に思うのは、謡の文言の終わりの三行ぐらいで成仏しちゃうんですよね。突然、深草の少将の霊が乗り移るのはわかります。けれど実演しているうちに突如「黄金の膚（はだへ）こまやかに」って言って、急にこの黄金の膚輝くものになっていくっていうのは、変だなあと思って、今日一生懸命考えていたんです。

考えてみますとね、実演して、自分がつれなくしたたくさんの男たちの気持ちがわかる。で、わかった時にね、ある贖罪の気持ちが湧いて、僧侶にも伝わって、そして総合的に、小町を輝く菩薩の方にね、誘ってくれたんじゃないか。位が急に改まるんですよね。「これにつけても後の世を願ふぞまことなりける」。そして仏に花を手向けたわけですけれども。

「卒都婆小町」は殊にいくつかの逆説から出来ている。例えば「襤褸老残」と「華やかな艶の雰囲気」という逆なものを合わせて表現しなきゃならない。つまり、今の残酷さと昔の華やかさ、今と昔の対比を一身に担わなければならない。そして僧と問答した時の知性と、深草の少将が乗り移るような狂気、これも表現しなければならない。そして狂気の果てに悟りの高みまで押し上げていかなければならない。そういうような三つくらいの逆説をこの「卒都婆小町」は止揚していくわけですね。総合しておかなきゃならない。そこに深さがあるので、小町物の中では「卒都婆小町」が一番哲学的で深い思想を持っているんじゃなかろうかっていう気がするんです。

この小町物の原点はどこにあったかっていうと、「玉造小町子壮衰の書」っていう仏教の書

物が奈良時代にあったんです。これは、玉造小町という女性がいて、非常に美人で裕福な家に生まれていた。しかし、家族が次々死に絶えて、玉造小町一人がこの世に残ってしまったわけなんです。そしてだんだん零落する。昔の零落はとっても早いんです。背景がなくなるといっぺんに零落をして、全国を放浪して歩いた。その挙句の果てに行き倒れになって、お墓に持っていかれて寝かされるんですね。そうするとそこに鳥が来て、つついたりして、非常に無残な白骨になっていく。その白骨になった姿こそ、本当の人間の原型なんだっていうことを皆に教えるために、「玉造小町子壮衰の書」っていうのがあったんです。その小町と小町がちょうど合っちゃったんですね。

「小町」っていうのはいったい何だろうっていうと、宮中の後宮にですね、女性たちが固まって住んでいた。そこん所を「町」と言った。その中で「小町」というのは、若い町の人っていう、そういう意味だったかなという学者もいます。だいたい小町は男と結婚しなかったかっていうと、なんと「古今集」の中には、小町の孫の歌があるんです。子供を生んだっていうことなんですね。現実の小町は結婚もして、孫の歌まで証拠として残っているという。けれど、今のように小町は数々の非常な伝説を生んで、それがお能の世界に残っているんですね。どうもおしゃべりいたしました。

平成二十年第四回（通算二百十五回）十一月三十日（日）十二時半始

大島能楽堂定期公演

仕舞
女郎花（おみなめし）　大島　衣恵
鉄輪（かなわ）　大島　輝久

地謡　金子敬一郎　松井　彬　出雲　康雅　狩野　了一

講演
卒都婆小町（そとばこまち）について　馬場あき子

舞囃子
松風（まつかぜ）　友枝　昭世
見留

大鼓　亀井　広忠
小鼓　成田　達志
地謡　大島　輝久　梅津　忠弘　長島　茂　金子　匡一　塩津　哲生　粟谷　能夫
笛　杉　市和

（休憩　十五分）

能
卒都婆小町（そとばこまち）

シテ（小野小町）大島　政允
ワキ（高野山の僧）宝生　欣哉
ワキツレ（従僧）則久　英志

大鼓　亀井　忠雄
小鼓　成田　達志

笛　杉　市和

後見　塩津　哲生　狩野　了一　長田　驍

地謡　大島　輝久　長島　茂　出雲　康雅　金子敬一郎　狩野　琇鵬　香川　靖嗣　友枝　昭世　粟谷　能夫

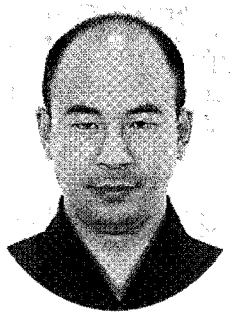
終了予定　四時頃

※大島能楽堂定期公演215回記念能で馬場あき子氏が講演されたものを植岡康子様にテープ起こしをしていただきました。誌面の都合上、全てを掲載できませんでしたことをお詫び申し上げます。

写真（P.2、4、5、6）　能「卒都婆小町」シテ 大島政允（2008.11.30）大島能楽堂　池上嘉治 撮影

ガス天に鯛ちくわ

幸流小鼓方職分
成田達志



(社)能楽協会　大阪支部常議員
(社)日本能楽会会員
重要無形文化財　総合指定
大阪能楽養成会主任講師
人間国宝　曽和博朗師及び正博師に師事

ガス天に鯛ちくわ。お婆ちゃんっ子だった私が、祖母の家で一番はじめに記憶に残っている鞆とのご縁だ。小学生の頃は母子家庭だったこともあり、休日のたびに神戸にいる祖父母の家で過ごした。そこで食べた鞆の浦の知り合いから送っていただくガス天の味は今も忘れられない。子供の頃の味の刷り込みは人生に影響を与えるそうだ。あの小骨が残ったジャリジャリ感と、えも言えぬ旨味。そしてその味と共に祖母が趣味で楽しんでいた能の小鼓に出会った。

福山とのご縁は私の曾祖母の父が鞆の保命酒の岡本亀太郎商店の次男の家に生まれたところにさかのぼる。その後、朝鮮元山に移住し酒造会社を営んだそうだ。そこで曾祖母にあたる岡本フサが幸信吉に小鼓を習った。今でも鞆や福山には親戚が多く、私にとって特別な縁のある土地だ。そして今は大島家の皆様にとてもお世話になっている。

成田達志（なりたたつし）氏

1964年　神戸市に生れる。
1974年　小学校５年生にて曽和正博師に入門、小鼓を始める。(10歳)
1976年　玄人として初めて有料公演にて初能『舎利』金剛青年能。(13歳)
1988年　大阪の若手能楽師５人と共に能楽グループ『響』を結成、新しい試みにより能楽の普及を目指す。
1992年　大曲『道成寺』(シテ 片山清司氏）を披く。
　　曽和一門会、関西テレビ報道番組に取り上げられる。(タイトル 世襲制度への挑戦)
1994年　『翁』頭取を披く、八坂神社奉納能。(シテ 金剛宗家 金剛巌氏)
2002年　山本哲也と共にＴＴＲ能プロジェクトを結成、『花形能舞台』をプロデュース。

近年、東京での公演も増え、関西を中心に全国で演能に参加。
1980年より達磨会を主宰。現在、東京達磨会をはじめ、石山・京都・奈良・大阪・神戸・三田・徳島にて達磨会を主宰。能楽小鼓の普及に勤める。
海外公演にも多数参加。

そもそも小鼓との出会いは祖母の趣味からというより、やんちゃだった私を更正するためだったようだ。まじめそうに見える？ 今の私とは違い、当時住まいしていた大阪茨木市の団地では、5階のまどから水をいっぱい入れたビニール袋を道行く人に向かって投げて遊んだ。この「水爆ごっこ」などはたまらない面白さだったが、よくよく考えると犯罪ものだ。恐ろしい。めちゃくちゃだ……。そんな困った子供の私を祖母が京都の曽和家に連れて行き、小鼓の稽古を始めたのだ。祖母の考えは的中し、私は小鼓に夢中になった。

小鼓の修行は毎日毎日小鼓を打ち続けるかというと、案外そうでもない。もちろん小鼓を打って稽古もして頂くが、師匠の稽古場で朝から晩まで毎日謡を謡うこと。これが小鼓の一番の修行になる。能の囃子は謡いを囃す事こそが命題となる。謡を知ることが一番大切と教えられた。実際、舞台で師匠の後ろに座り後見をしていると、地謡とのやりとりはとにかく凄い。協調したり、しのぎを削って反発したり。コミと言われる間を共有しながらコンマ数秒の間合いを緊張感の中に厳しく打ち込んでいく。そのためにも謡を知ることが大事なのだ。毎日毎日、謡を謡った思い出ばかりがある。

残念ながら私の修行した京都では観世流と金剛流がほとんどで、書生の私には喜多流のお相手は滅多になかった。年に一度養成会の全国大会があり、そこではじめて喜多流を拝見したときの驚きは今もよく覚えている。それは謡の強さだ。よく見ていると地謡の端っこに座っている人まで凄い勢いで声を出していたからだ。喜多流内では当然のことかもしれないが大小鼓方にとって力強い謡は魅力。大好きなのだ。お相手の機会は少なかったのだが、ある時、大島政允師に声をかけて頂き福山のお会にも出勤させて頂けるようになった。そこでまたまた驚き。申し合わせがないのだ。一度もお手合わせ無しに舞台に上がる。それも経験のない喜多流。こんな恐ろしいことはない。地頭の長田さんには楽屋でたびたび合わせて頂きお世話になった。私にとってこれらの経験が喜多流を勉強する土台になっている。それからは毎年福山にお邪魔させて頂き、遠い曲を始め本当に良い勉強をさせて頂き感謝するばかり。近年、喜多流のお会に出勤させて頂くのもこの経験のおかげだと感じている。また昨年は大曲「卒都婆小町」も勤めさせて頂いた。私の力ではとても歯が立たない演目だが一生の思い出となる経験になった。

ガス天に鯛ちくわの味から始まった福山や能楽とのご縁。そして私自身のルーツでもある土地で能公演を盛んになさっている大島家とのご縁を大切にしたいと思っている。

能「卒都婆小町」シテ 大島政允　小鼓 成田達志（2008.11.30）

輝久・衣恵のインタビューコーナー

帆足正規先生のご自宅に伺いました

私は近年、流儀以外の様々な能楽師の方とお話させていただく機会が増えてきました。すると一口に能といっても実に多様な考え方や芸の方向性があり、またそれが時代によって大きく変化している事に気が付きます。そうした中で今後能は、また自分自身は何を目指すべきなのか？　という危機感にも似た疑問が湧いてきました。

この疑問を誰かに聞いてみたい！　と思った時、真っ先に思い浮かんだのが帆足先生でした。帆足先生は祖父が最も信頼していたお囃子方であり、親しくお話しさせていただく機会も多く、その都度先生の圧倒的知識量と見識の深さに感銘を受けていました。この機会にと思い厚かましくも姉と共に二〇〇八年十二月二十七日、帆足先生のご自宅へお邪魔しました。

土間に囲炉裏があり、能楽関連の書籍が美しく整理された素敵なご自宅でのインタビューは予定時間を遥かに超えるものとなりました。

（輝久）

●能の近代化

輝久　帆足先生は長きにわたり笛方として、また観客としても能を見続けてこられた訳ですが、その間にどのような変化を感じておられますか？

昔の能と現代の能に違いがあれば伺いたいのですが。

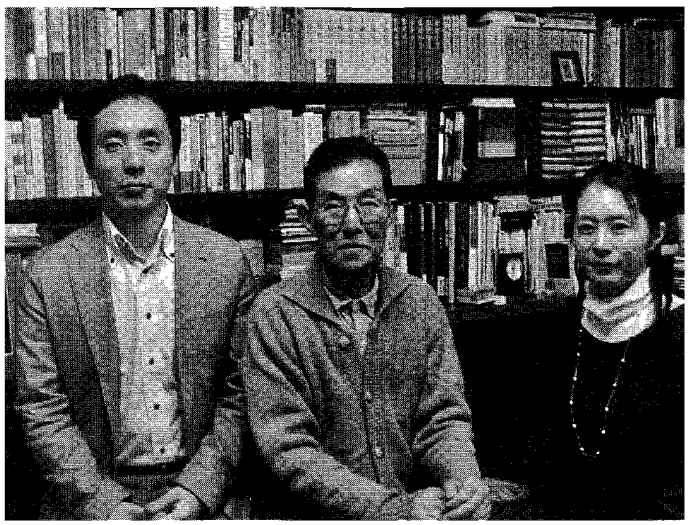
帆足　いつまでを昔の能と定義するのかは難しいのですけれど……。明治生まれの喜多六平太、野口兼資、観世雅雪、桜間弓川、辺りから戦後の世代とで能の質が変わってきているかなぁと感じてはいるのですが。

近年は考えて能を舞うようになった世代というか、その代表が観世寿夫だと思うのですが……、寿夫以降から能は近代化したと思います。テキストを読み込み、それを分析してというような。ただ寿夫自身の稽古がどうであったかというと、それ以前の叩き込むような稽古をしているんですね。その土壌の上に考えるという作業があった。

寿夫以後の人では稽古よりも頭で作り上げてる人が増えているように思います。ですから近代の能は知性的には進歩したと思います。逆に肉体的表現内容は劣ってきているのかなぁと。

衣恵　能以外の事でもそういった事はあるかもしれませんね。総じて近代化というのは肉体ではなく頭脳で物事をやろうとするような……。

帆足　そうそう、ですから簡単に言いますとアナログとデジタルの違いなんですね。ただ能というのはあくまでもアナログであるべきだろうと思うのです。確かに昔の人は今よりもっと不器用だったと思いますよ。シテ方で拍子合いの



謡を外す人はいっぱいいましたから。きちんと名の通った人でもそうです。今は玄人ならば誰でもちゃんと謡いますでしょ。

輝久　以前、粟谷菊生先生が「最近は無茶苦茶な舞台は無くなったなぁ。昔はハチャメチャなのがいっぱいあったよ」とおっしゃってましたけど（笑）。

帆足　そのハチャメチャがまた良いんですよね。観世雅雪先生なんて申合せが終わって楽屋に入って来たら囃子方に「あそこはこんな感じにやってほしいんだよ！」（膝頭を二回打つ仕種）と言って細かい手組の事や、拍数の事はおっしゃらない。「そんな事知るか」という感じで。たしかに技術的な事は近年解明されて進歩してきたんだけれど……。また能の一つの性質でしょうけれど、型付け通りキッチリやっていれば、なんとかなってしまうでしょ。だからこそ、そこに安住してはいけませんね。

●流儀という事

輝久　お囃子方はシテ方五流と付き合いがある訳ですが、それぞれの流儀の特長や重要性については如何お考えですか？

帆足　最近感じるのはどの流儀も観世流化していく傾向が凄く強いんですね。色んな理由があるのですが……。まず舞台数としては、やはり観世流が多いのでそれをよく目にする。また観世的な華やかさ、優雅さといったものが観客にもウケるんですね。メディアもそれを持ち上げ、大衆もそれに付いて行く。はたして本当にそれでいいんだろうかと。私は上掛りと下掛りとは芸質が全然違う所で生きていると思うんですね。だからその特長を活かさなければ流儀なんて意味がないなぁと思います。

　大きく分けて上掛りの幽玄の芸、下掛りの写実の芸。写実といっても一般的な写実性ではなく能独特の写実なんだけれど、それが下掛りの中でも喜多流は一番凄まじい物を持っている流儀だと思いますよ。それを活かさなければ喜多流が残っていく意味がなくなるんじゃないでしょうか。

輝久　能の一つの頂点に三番目物、夢幻能があると思いますが、一時代前の喜多流の方々、六平太先生や祖父にしてもそうですが、「景清」や「頼政」といった技巧的な曲を得意としていたといわれていますが、喜多流の名人といわれた人々の三番目物の舞台はどうでしたか。

帆足　喜多流の友枝喜久夫先生の「班女」をテレビで観たんですが、素晴らしく良かったんですね。テレビで良いと思う事は滅多にないんですが。前半の扇を狂言に叩きつけられた後、取り直して抱きしめる姿。後半の（欄干に立ち尽くして）の所で柱に背を付けてジッとしている姿。解釈の云々を超えて凄い！と思ったんですね。

　また六平太先生の松風を観た時も潮汲みの場面で潮を汲む手がサァァーと動くんですね。動き出したら一気にサァァーと！その一瞬を観ただけで満足させられてしまう程の凄さがありました。共に喜多流の女物の演り方、行き方なんですよね。表面的な写実ではなく、人間の奥底をえぐり出すような強さがある。ですから観ていて面白いという点では喜多流は一番面白いんですよ。

輝久　私が稽古してきた中で感じるのは優雅な美しさというのはどこか安心感がありますよね。そこを目指せば平均点は取れるというか。

帆足　そう、それは絶対にそうです。

輝久　それに対して写実的な型はうまくやれば素晴らしい効果を発揮するけれども、下手すると滑稽な物になって見るに耐えない事になってしまうという恐怖感を感じるのですが。

帆足　名人といわれる人達というのは、それが滑稽かどうかなんて気にしないんですね。気にしないから思い切った事が出来る。さっき言われた平均点を取りに行くというのは、上手を狙ってるんですよ。上手と名人とは違うんですよ。上手から名人にはなれないんですね。

　と、ここで帆足先生の奥様が自家製のパンで作ったサンドイッチをご馳走してくださいました。それを頂きながらまだまだ話しは続きましたので以降は次号に掲載いたします。

2009年 演能ご案内

開催日	催名	開演	会場	鑑賞料	演目
4月19日（日）	第216回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能「東北」大島衣恵 狂言「井杭」野村小三郎 能「小鍛冶」白頭 大島輝久
4月26日（日）	喜多流職分自主公演	12:00	東京喜多能楽堂	一般 6,000円	能「小塩」大島政允
5月3日（祝）	お能で遊ぼう	10:30	リーデンローズ練習室	無料・要申込	おうたい・紙芝居「せいおうぼ」
5月13日（水） ～18日（月）	アジアフェスティバル 北欧公演		ヘルシンキ ストックホルム		能「羽衣」「天鼓」 団長 大島政允
6月7日（日）	喜多流春の会	10:30	喜多流大島能楽堂	無料	能・舞囃子・仕舞・素謡
6月21日（日）	第217回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能「芦刈」大島政允 狂言「饗音曲」茂山あきら 能「飛鳥川」松井彬
7月28日（火）	福山八幡宮薪能	18:30	福山八幡宮	未定	未定
8月9日（日）	三和の森光信寺薪能	18:30	光信寺 （神石高原町）	一般券 3,000円 弁当付 4,500円	狂言「杭か人か」井上菊次郎 能「舎利」大島政允
8月16日（日）	瑞泉寺ろうそく能	19:30	瑞泉寺 （三原市久井町）	無料	奉納 能「瑞泉寺」
8月18日（火）	後楽園薪能	18:30	岡山後楽園	未定	狂言 茂山千作・野村萬斎 能「経政」大島政允
9月20日（日）	第218回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能「放下僧」長田驍 狂言「蝸牛」茂山千五郎 能「三輪」大島衣恵
9月26日（土）	喜多流青年能	12:00	東京喜多能楽堂	一般 4,000円	能「班女」大島輝久
10月18日（日）	総合文化祭 秋の会	未定	喜多流大島能楽堂	無料	仕舞・素謡
11月1日（日）	広島大島会 秋の会	11:00	妙慶院 （広島市中区小町）	無料	仕舞・素謡
11月15日（日）	第219回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能「朝長」大島政允 狂言「文荷」茂山七五三 能「一角仙人」金子匡一
11月17日（火）	はじめての能楽大会	13:00	岡山後楽園能舞台	無料	能学習発表・鑑賞会
12月2日（水） ～10日（木）	「清経」と「パゴダ」 能楽の古典と新作		ロンドン・ダブリン・ オックスフォード・ パリ		能「清経」大島政允 英語能「PAGODA」大島衣恵・輝久 J.Cheong作 R.Emmert節付

おたより・感想ありがとうございます

❖半年間、色々とありがとうございました。能を通して子どもたちは、たくさんのことを学んでいきました。姿勢、発声、忍耐……。通常では、学べない伝統文化を体験できたこと、一生の思い出になったと思います。

（福山市立鞆小学校六年生担任　小松瑞穂）

❖能クラブでは、お世話になりました。私は、初めて舞をしました。最初はなかなか覚えられなかったけど、クラブの時間以外にも家や学校で何回も練習しました。初めは舞がバラバラだったけど、先生がいっしょに舞ってくださったので三人の呼吸も合って舞がそろうようになりました。

おかげで薪能やリーデンローズの発表でもたくさんの拍手がもらえました。このことを生かして、来年は中学校でも心を一つにして頑張りたいです。

（神石高原町立来見小学校　六年生）

❖リーデンローズでの大観衆の中での舞台に参加させていただき、ありがとうございました。かわいらしいた い組さんから高校生、大人に至るまですべて大島家が教えたことで、教えるということはこんなにも尊いことなのだと、大島家の方々のこの十年の営みに尊敬の思いがいたしました。また同時に、能を大衆のものにしてくださったのだと大観衆を見て思いました。記念碑のような一日でした。

（久井町　森　和子）

編集デスクより

・数年来の念願であった大島能楽堂のパンフレットが出来上りました。友人の桑田直美さんのお力添えのおかげです。今後の能普及活動に役立ってくれることと嬉しく思っています。英語版・中国語版も作成予定です！

・本年五月、フィンランド・スウェーデン二ケ国へ能公演にまいります。ちょうど二〇〇九年はフィンランドと日本の国交樹立九十周年でヘルシンキのアジアフェスティバルに招聘して頂くことになったのです。（Y・O）

喜多流大島能楽堂

〒720-0814 広島県福山市光南町2-2-2
TEL 084-923-2633
FAX 084-923-8730
http://www.noh-oshima.com